

ゆるゆる

登場人物 男1

男2

女

住宅街、路地。夕方。

男1、パジャマを着て枕を抱えたまま、ずっと前を見ている。

手は拳、何かを睨み付けるよう。

学生服を着た男2やつてきて

男2 とろろくん。とろろくん。こんな所に居たんだ。蠮螋君さ、今日もう夜遅いからさ、うちで晩

御飯食べない？姉ちゃんが、蠮螋君も一緒にどうかって晩御飯。蠮螋君さ、最近あんまりいいもの食べてないんじゃないか？姉ちゃんが。だから今日は腕よりをかけてこちそう作ってくれてるって言うんだ。姉ちゃん最近中華に凝ってる、餃子とか皮から作っちゃうし、春巻きたって皮から作っちゃうし、なんでも皮から作っちゃうんだ。その皮がすんげえ旨いの、パリッパリでさ、チャーハンとかラーメンとかも皮に包んでくれたらいいのって心底思うよ。あー食べたいな姉ちゃんの皮だから一緒に帰ろうよとろろ君。

男1 …。

男2 とろろ君はおそらく好き嫌が多いだろうって、僕はそんな事無いて反論したんだけど姉ちゃんがああいうタイプは好き嫌が多いはずだ。女の勘だ。姉ちゃんは蠮螋君になんべんも会った事あるんだ。学校の行き帰りの道とかそのサークルとか、でも一番の決め手はあの時だ。蠮螋君のお母さんのお葬式の時、あの時姉ちゃん確信したんだ。この子は好き嫌が多いタイプだ。食わず嫌いだ。ねえ蠮螋君食わず嫌い？もしそうだとしたら姉ちゃんすげー蠮螋君の事理解してるだ。だから今日も絶対美味しいもの食べられるんだよ。あー食べたいな姉ちゃんの皮。だからさ一緒に帰ろうよとろろ君。

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 人は、死んだらどうなると思う？

男2 そんな事よりさ一緒に晩御飯食べよ。死んだらどうなるかどうかはさ、晩御飯食べてから考えよ。

姉ちゃんそつう話めつちや得意なんだ、毎日毎日「ムー」ばつか読んでるから。だから一緒に帰ろう

よとろろ君

男1 僕は今、死ぬのがめつちや怖い。死んだらどうなるか考えると寒気がする。

男2 そんな格好してるからだよ、さ早く帰ろうとろろ君。

男1 朝、目が覚めたら思っんだ、今日も生きてる、これにはいつか終わりが来るんだ。そう考えるのが怖い。恐くて目が覚めちゃうんだ。

男2 僕は目が覚めたら朝ご飯の事を考えちゃう。うちの姉ちゃん朝飯もめつちや得意なんだ。お味噌汁なんかも本だしとか使わないでかとおぶしから出汁取っちゃうし、その出汁がめつちやイイ匂いの。

あー食べたいな姉ちゃんの皮。

男1 僕はついに、考えてはいけないテーマに足を踏み入れましたよ。とてつもなく重い、深いテーマだ。

男2 僕がかぼちゃが嫌いなんだ。かぼちゃの煮た奴なんてもう最低。おかげでかぼちゃが出てきたらどしようかと思う。それが姉ちゃんの皮で包んであったらもう究極の選択だよ。だって僕の大嫌いな物が、大好きな物に包まれて出て来るんだ。もーそなたらどうしよう？ねえどうする？とろろ君。

男1 君は、幸せだよ。

男2 幸せじゃないよ全然。かぼちゃの煮た奴がこの世にあるうちは僕の真の幸せは訪れない。

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 今日、うちのペロが死んだ。

男2 …ペロって誰？

男1 犬。

男2 犬死んだの？

男1 うん。僕が、小学生の時にここで拾って、かれこれ10年だ。10年生きて。

男2 あ、そつ。

男1 犬の年齢で10年って言ったなら、何歳くらいになると思う？

男2 うーん、60歳。

男1 …まあそんなもんだね。

男2 60歳って言われると、もうちょっと生きてもイイよね。

男1 ペロは、良く出来た番犬だった。知らない人を見るとけたたましく吠えた。

男2 とろろ君は？

男1 ん？

男2 とろろ君には吠えた？

男1 …だから、知らない人を見るとけたたましく吠えた。僕 飼い主
男2 何犬だったの？

男1 知らない。

男2 知らないの？

男1 雑種。

男2 雑種か。

男1 雑種だろうがなんだろうが、ペロはペロだから。

男2 あのね、犬は食べちゃいけないと思う僕。どこかの国では犬を食べても良いらしいけど、やっぱり犬は食べられない。だから一緒に帰ろうよとてろろ君

男1 うん、犬を食べるなんて僕言つてないから。

男2 うん、そうだよ。だからダメだよ。ペロを食べたら。

男1 わかるかな？僕は今、ペロの死を悲しんでいるから、そこに犬を食べる話はやめて。

男2 うん、わかった。じゃあ早く帰ろとてろろ君。あー食べたいな姉ちゃんの皮。

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 それからさ、僕の事とてろろ君呼ぶの、やめてくれないかな。僕の名前、蠅螂太郎だから、間違えないで。

男2 うん、知ってるよ。蠅螂太郎君、略してとてろろ君。

男1 うん、略さないで。人の名前勝手に略さないで。

男2 木村拓哉は？

男1 うん、キムタクは、キムタクって呼ばれて喜んでんだから良いんだよ。僕は見ての通り喜んでないからさ。

男2 あ、うん。

男1 当たり前じゃないかそんなの。山芋の擦った奴で呼ばれて喜ぶ方がどうかしてるよ。バカにしないでと言いたい。

男2 はい！

男1 ならいいや。とにかく一人にしてくれないか？

男2 なんで？

男1 ちよっと、ペロの事を考えたいもんで。

男2 ヤダ。だつてとてろろ君死ぬつもりでしょ。ペロの後を追つて死ぬつもりでしょ？

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 …それはデカ過ぎる。

男2 じゃあ死なないの？

男1 …うん。

男2 じゃあ一緒に晩御飯食べよ。あー食べたいな姉ちゃんの皮

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 そういう事じゃないんだわ。晩御飯食べれんくらい悲しいけど、後を追つて死ぬほどではない。とかそういうなんか、そういう風にきちんと計れるもんでもないから。まあ君にこんな事言つても分からないだろうけど。毎日のほーんと生きとる人だからね君みたいなもんわ、死ぬとかよくわかんない人聞たからさ。

男2 そんな事ないよ、祭りで買った金魚は良く死んだ。おいしくなかった。

男1 金魚食べたの？！

男2 焼いて。

男1 …。

男2 でも生きてる時は指近づけると寄ってくるの。可愛かった。

男1 ペロだつて僕が帰つて来るといつも顔をペロペロ舐めた。

男2 だからペロつて言うんだ。

男1 うん、違う。そんな事言つたらいつも噛んで来たら、カムつて名前になつちゃうから。

男2 帰つて来ていつも噛む犬つてどういう犬？ちゃんとしつけなよ。

男1 ペロの事じゃないから。ペロは噛まない。

男2 ほらもうそろそろ飯炊ける。姉ちゃんも待つてる。さ、帰ろとてろろ君。あー食べたいな姉ちゃんの皮。

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 だからとてろろ君呼ぶの止めて。山芋の擦った奴だと思われるの嫌だから僕。

男2 大丈夫だよ、とてろろ君は山芋の擦った奴なんかじゃないもの。

男1 うん、それは知ってる。僕も自分が山芋の擦った奴だとは思つてない。

男2 じゃあとてろろ君は、山芋の擦った奴なんかじゃない。

男1 うん、竹内君はそう思つてもね、竹内君が僕の事とてろろ君呼んでると、周りで聞いている人が、僕の事山芋の擦った奴だと思つちゃうんだ。どこにどんな人が居るかかわからないからさ。

男2 でもとろろ君は見た感じ山芋の擦った奴じゃないよ、心配しないで。

男1 うん、それは心配してない。君の頭の方を心配してるんだ僕は。

男2 僕の頭は大丈夫だよ、姉ちゃんが毎朝魚焼いてくれるから、焼き魚は頭を良くする効果があるそう
です。

男1 うん姉ちゃんの話はもういいや。

男2 うちの姉ちゃん朝めっちゃ早い。なんかモーニングっていうのに行かなきゃいけないらしくって、
それに並ぶ為にいつも早起きしてんの。ついでに僕も起こしてくれるから僕は無遅刻無欠席でいられる
んだ。姉ちゃんて凄いなと思うよ。ご飯めっちゃおいしいし、朝めっちゃ起こしてくれるし、僕姉ちゃ
んの弟でホント良かったと思う。

男1 うん姉ちゃんの話はもういいから。じゃあ例えば竹内君がさ、タケチンと呼ばれたとしようよ。

男2 ヤメテよ、そんなのまるで僕のちんこが竹みたいじゃん。

男1 だろ？でも竹内君のちんこは竹じゃないよね？見た事ないけど。

男2 うん、僕のちんこは竹じゃない。信じて。

男1 うん、僕も竹内君のちんこが竹だなんて思っていないから安心して。

男2 した。

男1 でも、僕が竹内君の事タケチンって呼んでたら、周りで聞いている人は竹内君のちんこは竹じゃな
いかって思っ訳。

男2 そんなの思う訳ないじゃん、だつてちんこが竹の人なんて居ないもん。

男1 うん居ないよ。僕もちんこが竹の人が居たら是非見て見たいと思う、どこからおしっこが出るのか
ってね。

男2 そんなの穴からに決まってるじゃん。竹の真ん中には穴が空いてるんだから。

男1 でも、竹の真ん中の穴は、一個一個仕切りがあるからね、おしっこはストレートに出るこないはず
なんだ。

男2 え、じゃあどうやって出るの？

男1 だろ？気になるだろ？

男2 うん、気になる。

男1 僕らが今、竹のちんこの事を気になっているように、他にも竹のちんこの事を気にしている人が居
ると思う。そんな人がさ、僕が竹内君の事タケチンなんて呼んでたら、いよいよ竹のちんこの持ち主を
見つけたと思つて近づいてくると思うの。

男2 うん、で？

男1 そしたらみんなさう言うよ竹内君に向かって、ちんこ見せて下さいって、そしたら竹内君なんて言

う？

男2 イヤです、つて言う。

男1 うん。でもその人達がさ、君はタケチンって呼ばれていたからもしかしたら竹のちんこの事かもし
れないので、ちんこ見せて下さいって言うよ。そしたら？

男2 僕のちんこは竹じゃないですつて言う。

男1 だろ？でもその人達は諦めないよね？今まで散々竹のちんこを探してきた戦士達だから。

男2 うん。

男1 だからきつと竹内君のパンツ脱がすよ。阻止できるかい？戦士達から。

男2 出来ないと思つ。

男1 だろ？あーあ、竹内君外でフルチンだ。恥ずかしいよ。どうせ竹内君のことだから包羞たる？

男2 ううん、全部じゃないよ。先つちよだけ出てる。

男1 それはなおさら危険だ。竹の子かと思われるよ。

男2 これは竹の子じゃありませんつて言う。

男1 でも信じゃないよね？

男2 うん、戦士達だから。

男1 どうする？取られるよ、ちんこ。

男2 ヤダ、子供は産んでみたい。

男1 うん、子供を産むのは竹内君じゃない。でも子供を作れなくなつちやうよね？

男2 なつちやう。

男1 だろ、じゃあどうしたらいい？相手は戦士達だよ。

男2 鍛える、身体を。

男1 ほお、で？

男2 その為に飯食べる、あー食べたいな姉ちゃんの皮。

男1 うん、見事に戻って来てしまった。

男2 さ、早く帰るところ君。

男1 僕はね、僕の事とろろ君って呼ばないでつて話にしたかったんだ。今度言ったら僕もタケチンつて
呼ぶからね。

男2 タケチンは嫌だ、僕のちんこがまるで竹みたいだから。

男1 そうだろ、だからとろろ君って呼ばないでね。さもないとまた同じ話を展開するからね。ていうか、
へ口が死んだ日にちんこの話しないで。

女の声 みどり。

男2 あ、姉ちゃんの声だ。どうしようとする君？姉ちゃん来たよ。姉ちゃん来ちゃった。

男1 お前、みどりって言うの？

男2 とろろ君がちゃんこちゃんこ言ってること、姉ちゃんに聞かれちゃったかも。どうしよう？とろろ君が破廉恥な男だと思われちゃう。じゃあこっしよ？インコの話してた事にしよ？

男1 なんだだよ？

女がすり鉢でとろろを擦りながらやって来た。

以下、女のセリフは全て小声で。

男2 (咳払いをして) さあとろろ君、うちの姉ちゃん。姉ちゃん、とろろ君。

女 (うつむきながら) …何やってんのもう。遅い…。

男2 ごめん姉ちゃん、なんかとろろ君が、インコの話、してたから。

女 インコ？

男2 うん、鳥の。インコって言ったら鳥でしょ？

女 うん。

男2 さあとろろ君、楽しいインコの話して。

男1 竹内君。

男2 はい。

女も近寄る。

男2 あ、姉ちゃんも竹内だから。どっちっ。

男1 うん、君に決まってるじゃない。

男2 あ、なに？

男1 今日はさ、ペロが死んだ日だからさ、そつとしいてくれないか。

男2 ヤダ。

男1 特にインコの話なんてどうでもいいからさ。

男2 シー、そんな事言ったらダメじゃないかとろろ君。姉ちゃん、僕達はずっとインコの話をしてたんだからね。インコってなんで喋るんだろうねとか、そういう話をね、してたんだ。ちゃんこの事なんか一切話さないからね。とろろ君はそういうヤラシイ男じゃないから。ちゃんこは無縁の生活を送っているスポーツマンなんだ。そつだよねとろろ君。

女 ちゃんこ？

男2 …とろろ君、今姉ちゃんこたなんて言っていないから安心して。姉ちゃんこたかそういう下ネタ一切言わない人だから。今のもホントのちゃんこの事じゃないから。きつと何かおいしいものだと。思っ。あー食べたいな姉ちゃんのちゃんこ。あ、姉ちゃんにちゃんこは生えてないから安心して。あー僕は今何を言ってるんだ。そつだお腹空いた。姉ちゃんそれ何？なにこれ気持ちわり。すげー一杯ある気持ちわり。

女 山芋の、擦った奴。

男2 え、これが山芋の擦った奴？気持ち悪り。

女 出汁、入れたから。

男2 出汁？気持ち悪り。どろつとしてる気持ち悪り。あー早く食べたいなあ姉ちゃんの皮…は無いの？

女 皮？

男2 ほら餃子とか春巻きとか、パリパリの奴。

女 今日はだって、和食だから。

男2 え、でもさ、とろろ君、皮食べたいって言ってたよ。

男1 言っていないだろそんな事。

男2 え、和食でもさ、皮作れば良いじゃん。

女 お鍋に火掛けつ放したから。

男2 あ、ホント？じゃあ早く帰ろ。とろろ君、トムとジェリー一緒に見よう。

男1 …竹内君。

男2 はい。

女も近寄る。

男2 あ、姉ちゃんも竹内だから。

男1 うん、だから君に決まってるじゃない。ていうかお姉さん呼ぶ時はさすがに竹内さんって呼ぶから。ていうかお姉さんに用事ないから僕

男2 おい、いくらとろろ君でもそれはひどいよ。姉ちゃんがせつかくとろろ君も一緒にどうかって晩御飯作ってくれたのにそれはひどいよ。もついい。帰ろ姉ちゃん。

女 ヤダ。

男2 じゃあ僕もヤダ。ねえ、それ何？すげー一杯ある気持ちわり。

女 …飯に掛けると美味しいよ。

男2 えー、どろっとしてるし気持ち悪いよ。パリッパリのがいいのに、あー食べたいな姉ちゃんの皮。

男1 竹内君。

男2 あ、僕の事だ。何？

男1 僕は今日、君んちで一緒に晩御飯は食べないです。ペロはもう、飯食べられないので、僕も食べない。
い。

男2 姉ちゃん聞いた？どろろ君もう、飯食べないって。死んじやう。どうしよう？

女 死なないで。

男2 うん、僕も死なないでって思う。どろろ君死なないで。

男1 うん、死なない。

男2 良かった。良かったね、姉ちゃん。

女 うん。

男1 すぐには死なない。僕死ぬのめっちゃ怖いから。死んだらどうなるか考えるとめっちゃ怖いから。

男2 あ、そういう話は姉ちゃんに聞いた方がいいよ、毎日毎日ムーばつか読んでるから。

女 ちよつと…、

女、恥ずかしそうに男2をひじ打ち。

男2 姉ちゃんどろろ君に教えてあげて、死んだ後の話

女 …あ、はい。えー、あれは、私が大学一年の時の話です。友達五人と、夜、ドライブに出掛けようとして

言う話になりました。

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 これ怖い話？

男2 姉ちゃんこれ怖い話？

女 …死んだ後の話

男2 死んだ後の話だつて。

男1 そういう怖い話はいいいからさ。

男2 怖い話はいいいって。

女 死んだ後の話よ。

男2 そっだよわ。どろろ君死んだ後の事が気になるんでしょ、だから姉ちゃんそういう話めっちゃ得意だからさ、きつと真剣に考えてくれると思っただ。

男1 だって姉ちゃんムーばつか読んでるんでしょ？

男2 うん、ムーばつか読んでる。

男1 そんなムーばつか読んでる人の意見なんか聞きたくない。

男2 でもどろろ君と姉ちゃん、凄く話が合うと思うよ。

男1 違う、そういう話じゃなくて。僕はね、死んだらどうなるのかが知りたいのね。

男2 うんだからね、

男1 ちよお聞け。

男2 はい。

男1 死んだら何が怖いって、何も無くなるんじゃないかっていうのが怖いのね。

男2 ン？

男1 だからさ、何もかもがゼロになっちゃうっていうのがさ、たまになく怖いさ。僕の意識とか、今、こーやって見えている世界とか、そういうのが、僕が死ぬ事によってなんにも無くなっちゃうって事がさ。つまりね、そういう死後の世界だとか、産まれ変わるとか、幽霊とか、そういう風になるんだつたらまたマシなの。

男2 幽霊になるんだつたらマシなの？

男1 そう、だから何にも無くなるんじゃないんだつたらね。もう、「無」が怖い、一番。無。

男2 ムー？

女 ちよつともつ…、

女、恥ずかしそうに男2をひじ打ち。

男2 もうやめてよね。言っとくけどね、どろろ君幽霊になつて出てきてもう、うちで晩御飯食べさせないからね。いくらどろろ君だつて知つても怖いものは怖いんだからね幽霊は。じゃあこーしよ、せめてお母に出てきて、天気の良い日に公園で、ね。

男1 よお喋るなお前。

男2 だから幽霊で出てくるんだつたら天気の良い日にしてね、絶対。

男1 わかったよ。

男2 うわ、もう完全に出てくるつもりだもん。違う違う、出て来るなら公園でつて言ってるだけであつて出てきて欲しい訳じゃないんだから。出てこないに越したことはないんだからさ。

女、男2の服の袖をひっぱる。

男2 何？

女 耳打ち。

男2 : 姉ちゃんは出てきて欲しいって。とろろ君幽霊になっても、うちで晩御飯食べてイイって。だって幽霊になる前に食べに来てくれた方がいいでしょ？

女 うん。

男2 僕は絶対にイヤだなそんな、幽霊と一緒に晩御飯なんて。とろろ君言っとくけどね、僕達まだ高校生だよ、そんな死ぬ事なんて考えてる暇無いと思っよ。

消防車が近くを走って行く。

女 火事？

男2 ん？

女 火事でもあった？

男2 ああ、とろろ君うん、なんか良くわかんないけどパジャマなんだよね。

男1 僕はね、学校から帰って制服脱いだらすぐパジャマ着る人だから。

男2 なんだって。

女 じゃあ、朝飯も？

男2 あ、ホントだね、とろろ君晩御飯食べたらさ、その後朝飯も一緒に食べよ。そうしよう？

男1 夜通し晩御飯は食べないから僕。ていうかもう僕の事はほっといて！

男2 とろろ君。とろろ君ね、じゃあ一緒に晩御飯食べよ。御飯食べたらさ、元気になってたぶん死なないと思うから。とろろ君死ぬの怖いんだってたら飯食べなきゃダメだよ。このままたとろろ君絶対僕より先に死ぬからね。そんな飯食べない人が長生きできるわけないもん。だって人は飯食べないと死ぬのが早くなるに決まってるんだからさ。とろろ君死ぬの怖い癖に僕より先に死ぬんだよ。そんなんでいいの？せつかく姉ちゃんがご飯作ってくれてるのにもったいないよ。だってすごい美味しんだよ。姉ちゃんの皮。

女 みじり…。

男2 だってせつかく姉ちゃんがとろろ君も一緒に晩御飯食べたって言うてるのにさ、死ぬのが怖い人と一緒に晩御飯食べてもおいしくないじゃん。

男1 だからもういいからさ、僕は食卓には似合わない人間なんだ。もう帰って。

男2 だからとろろ君、死ぬなんて言わないで一緒に晩御飯食べよ。

男1 誰が死ぬなんて言った？

男2 もういい加減一緒に晩御飯食べなよ！僕はとろろ君を見殺しにはできない！

男1 なんて俺が死ぬことになつとんだ。

男2 とろろ君のわからず屋！こうなったら僕、晩御飯ここに持って来るからね！

男2、去る。

女 死んだらですね、

男1 …へ？

女 死んだら…、無になる訳じゃなくって、みんな一緒にになります。

男1 …え？

女 全ての魂は、一つになります。この宇宙の外側には、魂の集集体、というのがありまして、我々はそこからやって来るんですね。

男1 …。

女 超古代文明の人はですね。

男1 は？

女 超古代、の、人類は、超能力が使えたんですね。それはなぜかというと、魂の濃度が濃いからです。魂の濃度が濃いとその分魂の強さが強い訳です。なんで魂の濃度が濃いかというと、地球の人口が少なかったからです。つまり、魂の量はいつの時代も一緒でして、人口が少ない時はひとりひとりの濃度が濃いのです。現代の人の何十倍の魂の濃さを持っていると、思いが何十倍も強い訳ですから、超能力が使えるんです。

男1 …。

女 ですから、私達3人が、同じ思いを込めたらですね、思いが3倍になって超能力つばい事が使えるんです。

男1 超能力つばい事？

女 という事はですね、3人よりもっと多くの人が、同じ思いを込めたらですね、もっと大きな幸せを作る事も出来ると思うんです。例えば、こんなに汚れてしまった地球でも、全世界の人が地球を奇麗にしたいと思つたらすくなっちゃうでしょうし、こんなに下ネタばっか言ってる劣居でも、ここに居る人全員がツイッターとかで宣伝してくれたら、簡単に人気劇団になれちゃうんです。

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp